

巻頭言

保育雑感 幼児の社会性とは何か

鯨岡 峻



一、早い社会性を願う風潮

いま、保護者も保育者も、子どもが早く社会性を身につけることを願う。ご挨拶ができるように、皆と一緒に行動できるように、問いかけにはきはきと応答できるように、自分の思いをことばでしっかり表現できるように、等々、というわけである。そのために、さまざま「させる」働きかけが生まれる。そしてそのような目に見える形での社会性が身につく程度に応じて、保育の良し悪しが議論されることになる。

こうした「できる、できない」にこだわる動向に対して、正面切つて異を唱えることは難し



い。しかし、そこで想定されている幼児の社会性は、ほとんど大人にとつての社交性や社会適応性と変りないものである。それが早期に身につけば、その後の対人関係や集団生活はすべてうまくいくかのように考えられているが、わが国の現状はむしろその逆のことを示していないだろうか。ここに、幼児の社会性というものを改めて考え直してみる必要がある。

二、人と「共にある」ということ

幼児がその成長の途上で潜らなければならない大きな壁の一つは、他者という存在との関係のもち方である。一人の子どもにとつて、自分のいろいろな思いを実現するためには必ず他者が必要になる。しかしその他者は自分とは異なる存在であり、常に自分の思い通りに動いてくれるわけではない。この両面のことを少しずつ理解しながら身近な他者と関係を築いていくことは、幼児の世界にあつても避けて通ることのできない大きな課題であり、しばしば大きな壁になるものである。それは周囲や他者から主体として受け止められ、主体として生きてきた子どもが、他者もまた主体として生きているのだということを受け止め、他者を他者として受け止めるようになることもある。

この相互主体的な関係を簡単に言い換えれば、それは身近な他者と「共にある」「共におれらる」ということである。この対人関係の基本の成り立ちこそ、幼児の社会性の基盤をなすものである。ところがそれは、目に見える行動としての社会性とは異なつて目に見えにくいため



に、その重要性がなかなか理解されない。このことを一つのエピソードを通して考えてみよう。

三. 「コキンていった」

私のような部外者が保育の場を訪れると、多くの子どもたちはときに興味津々の様子で、ときに胡散くさげに当の部外者を見て、中には「だれ?」「なにしにきたの?」と直截に訊く子もいる。近寄ってこないけれども、しつかりアンテナを立ててこちらの様子をうかがっている気配の子もいる。そういう対峙的な関係のありようにも幼児の社会性の一端が現れているといつてよいが、しかし私がいま取り上げたいのは、もつと密やかな「共にある」あり方である。

ある園を訪れて壁に貼ってある作品を見ていたとき、私の傍らに来て一緒に見ていたAちゃんは、「これは○○ちゃんが描いたんやで」と話しかけてきた。私は「そおー」と話を合わせていたが、Aちゃんがしゃがんだので、私もしゃがんだ。そのときAちゃんは「コキンていった」とつぶやいた。私の膝は歳のせいで関節を曲げるときに微かに音がすることがあるようなのだが、どうやらAちゃんはそれを聞きつけたもようである。

四. 社会性とは何か

取りとめもないエピソードであるが、しかし私はこのAちゃんをつぶやきに「はっ」とし



た。このつぶやきは、Aちゃんが私という部外の他者に関心を向けているというだけでなく、私に気持ちを持ち出し、私に寄り添っていること、私と「共にある」ことを告げているように私には聞こえた。つまり、Aちゃんが私とそこに「共にある」とする中で、このつぶやきが紡ぎ出されたように私には思われたのである。その様子は、常日頃、私たち大人が子どもと向き合うときに、子どもの方に気持ちを持ち出す仕方、寄り添う仕方にとてもよく似ている。それこそが対人関係の基本、真の社会性の基盤なのである。

Aちゃんがあのようになるとばを紡ぐことができた背景には、おそらく周囲の大人がそのような「共にある」あり方、つまり自らの気持ちを持ち出して子どもを受け止めるその仕方を示してきたからに違いない。逆に、目に見える「社会性」を早く身につけさせようと「させる」働きかけを重んじ、子どもの気持ちを受け止める姿勢の弱い保育の場では、Aちゃんのような柔らかい心をもった子どもを発見することは希である。

社会性とは何かという問いに真正面から答えるのは難しい。しかし真の社会性の基盤を培おうと思えば、子どもに強く働きかけて形としての社会性を身につけさせる前に、まずは大人が子どもに気持ちを持ち出し、子どもを一人の主体として受け止め、子どもと「共にある」とすることが大切である。その対人関係の基本を子どもが取り込むことによって、初めて他者との関係が築かれ、真の社会性に拓かれていくのであって、形にはめ込むことが社会性の育成ではないことを、ここで改めて強調しておきたい。

(京都大学)